

氏名 伊藤 博美

本論文は幕末から近代にかけての謙讓語の歴史的展開を、従来のように類型に分けるのではなく、謙讓語形相互の意味の違いとして論じる。全体は2部12章から構成される。

序章では、これまでの敬語の研究史を、問題関心のあり方という観点からまとめ直し、従来の研究の問題点、そして本書での研究の目的と方向性を示す。

第1部第1章では、特に「お～する」が主語から補語への働きかけがあり「意図的加害性」がない場合に用いられることを示し、さらに動詞を、補語が格表示され受益性があるか中立の動詞(A)、補語を格表示しない動詞(B)、補語が格表示され加害性を持つ動詞(C)に分け、「お～する」はA、B群に用いられ、C群は一部にしか用いられないとする。

第2章では、幕末から大正期にかけて、「お～申す」が減少し「お～申し上げる」が若干用いられる程度になったのに対し、「お～する」が増加する有様を例示する。

第3章では、「お～申す」に用いられる動詞はA群とC群が多くB群は僅少なのに対し、「お～する」に用いられる動詞はA群が多く後にB群も用いられることを示す。

第4章では、「お～する」に次第にB群が用いられるようになる理由を「受影性配慮」の傾向が高くなったためであるとし、「させていただく」の用法も説明できると論じる。

第5章では、「お～いたす」は江戸後期に成立したが、先行して成立した「お～申す」と違い、主語を低める謙讓語B(丁寧語)の用法を担い、役割分担をしていたことを示す。

第6章では、第I部の議論を総括し、「お～申す」「お～いたす」「お～申し上げる」「お～する」「させていただく」の歴史的変化を受影性配慮の強化という観点でまとめる。

第II部第7章では、敬語の正誤に関するアンケート調査をもとに、高校生では上下意識によって敬語を使い分けしているのに対し、社会人は言語方略としても用いることを示す。

第8章では、因子分析という統計的手法を用い、「お～する」を中心とする謙讓語の自然さの判断をもとに、上下関係の他さまざまな要因が関わっていることを明らかにする。

第9章では、「てくれる」と「てもらう」などの受益表現について、「受益」と「恩恵」とを区別すべきであることを論じ、また両形式の丁寧度の高さの違いについて考察する。

第10章では、ここでもアンケート調査をもとにした統計的手法を用い、今後「お～する」が尊敬語化すること、「させていただく」が謙讓語B(丁寧語)化することを予測する。

終章は、謙讓語の歴史的変化の傾向を再確認し、今後の研究課題を提示する。

本論文は、個々の謙讓語形相互の違いがあることを実証的に示した点において、敬語研究全体からすると部分的だが大きな成果であると高く評価できる。この理由から、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。